

NAFSA 2008 Annual Conference and Expo

米国国際教育者協会 2008 年年次総会

期間：2008 年 5 月 25 日（日）～30 日（金）

場所：Washington Convention Center (Washington DC)

世界中から国際教育関係者、高等教育関係者、語学教育関係者など約 9,400 人が参加
高等教育の国際化及び国際教育交流に関する様々なテーマの下で、ワークショップ、シン
ポジウム、セミナー、セッション等が 100 以上提供された。日本からの参加者は約 150 人。
同時に国際教育博覧会(Education Expo)が開催され、世界中の大学や国際教育交流に関わ
る業者がブースを構えていた。日本からも多数の大学が、JASSO の日本留学フェアの一環
として、あるいは独自にブースを設け、プロモーションを行っていた。

Advancing Campus Internationalization: Integrating Institutional Review and Learning Outcomes と本ワークショップで事例として挙げられた大学のセッション (2008 年 5 月 25 日と 27 日)

このワークショップとセッションは、キャンパスの国際化を促進しようとしている米国の
大学の上層部や全学的なチームに対して、各種の会議、出版物、プログラム等を通して支
援を行っている American Council on Education (ACE) が中心となって実施された国際
化推進に関する全学的なレビューと学習成果をテーマとしたワークショップであった。

ACE の大学国際化支援事業のサイト(Center for International Initiatives)

<http://www.acenet.edu/Content/NavigationMenu/ProgramsServices/cii/index.htm>

前提として、米国の大学は国際化という場合、教育の国際化にきわめて特化している傾向
があることを理解しておく必要がある。

1. 国際化に対する全学的（統合的）なアプローチ

国際化に対する全学的（統合的）なアプローチとは、大学が国際化のために何を行っ
ているかを現状分析（国際化に関する活動を洗い出すためのレビュー）をるところか
ら始まる。次に、大学が国際化のために行っている活動のインパクトをよりよく理解す
るために、グローバルな観点から学生の学習成果とそれを評価する手法を開発する必要
がある。そして、上述のレビューの結果と学習成果を統合したものが、戦略的な国際化
計画へと結びつく。

2. 国際化のレビュー

国際化のレビューとは、①キャンパスにおける国際化またはグローバル化のためのイ

ニシアティブが果たした実績を評価する、②国際化計画のための基盤となる情報を収集し分析する、③相乗効果に影響する強み、弱み、格差、そして可能性（将来性）を識別する、そして④全学的に教職員・学生を国際化に関するディスカッションに関与させるためのプロセスといえる。

3. 国際化のレビューを行う意義

国際化のレビューを行う意義としては、①現状分析と資源投入への重点（優先）分野の明確化（中長期計画への反映と達成への支援）、②建学の精神・理念の再認識、③大学の優位性と国際化のリンク、④国際化を阻む障壁の可視化、⑤レビュー結果（成果）の帰属と透明性（公開）の確保→結果を議論する学内コミュニティ（共有化）、⑥自己評価・自己改善の学内文化醸成（何のための評価か）などが指摘される。

4. 国際化のレビューでの対象

国際化のレビューでの対象としては、①教育機関としてのコミットメント（ミッション、ゴール、ビジョン）、②国際化のための大学としての環境整備、③組織やポリシーの構造、方針、実践、④カリキュラムと課外活動、⑤海外留学と海外研修（インターンシップを含む）、⑥外国の大学との連携、⑦キャンパス・カルチャーと教員の知識・関心、⑧個別（国際化へ向けての活動）の構成要素間の相乗効果と関連性等が挙げられる。

5. グローバルな観点からの学習成果の明確化とレビューの過程

グローバルな観点からの学習成果を明確に抽出することは、国際化のレビュー過程に以下のような効果をもたらす。①アドホック（場当たりの）アプローチからの脱却を推進する、②カリキュラムやその他のインプットと学生のための望ましい成果の間の整合性を図るための指針を提供する、③利害関係者に大学の活動のインパクトを理解させる、④質的な改善（進歩）の文化を醸成する、⑤認証評価機関を納得させる、⑥国際化計画における活動の優先順位をつけられるようになる。

6. 学習成果とそのアセスメントがもたらす課題

学習成果とそのアセスメントによって取り組むべき基本的な課題として、①学生に何（知識¹、スキル²、考え方³）をどう学んでもらい、何が出来るよう（レベル）になってほしいか、②学生がどこでそれらの知識、スキル、考え方を習得できるか、③学生が実際にこれらの知識、スキル、考え方を習得した（学習成果が上がった）ことを証明する

¹ 諸外国に関するさまざまな事情、グローバルな課題に対する理解、異文化理解、自分の文化に対する理解。
² 上記の知識を基に的確に活用できること、外国語によるコミュニケーション能力と異文化間コミュニケーション能力、それらを多様な場面での確に使える技術。
³ 異文化の言語、芸術、宗教、哲学を尊重し、理解しようとする姿勢、異文化を受入れ、文化的な多義性に寛容な姿勢、国際的な（異文化的な）経験を積極的に得ようとする姿勢。

ものは何か、④成果を実際に活用するのは、卒業後、実社会に出てからであるため、その準備として、在学中に学外での学びの機会（インターンシップや留学、海外研修）をどう提供できるか、などが挙げられる。

7. 戦略的プランへの移行

戦略的プランへ移行するためには、①プラン策定の過程を理解すること、②特別なチームを編成し、そのチームに戦略的プラン策定の委任をする、③自大学の文脈にあうようにプランを位置づける、④国際化のレビュー過程から導き出された提言を進展させる、⑤プランの中での優先順位を付け、その支援を構築することなどが重要である。

8. 戦略的プランの要素

戦略的プランの主たる要素としては、①国際化への明確なビジョン、②戦略的目標、③パフォーマンス指標（成果としてあげる事項と達成の証拠）、④時系列に基づく、詳細なアクション・プラン、⑤責任を持つ役職（役員や理事）の明確化、⑥財政的裏づけなどが挙げられる。

9. 戦略的国際化プラン策定の段階的プロセス

戦略的国際化プラン策定の段階的プロセスとしては、以下の15段階を提示したい。

- ①国際化の重要性、喫緊性を主張する、
- ②役員、理事等で国際化に熱心な、いわゆる国際化推進派を見つけ出す、
- ③戦略的国際化プラン策定のためのチーム（委員会）を編成し、チーム構成員間のコミュニケーションの取り方（議事日程等を含む）を決めると共に、役員または理事からそのチームにプラン策定のための素案作りを委任する、
- ④全学的な目標やミッションを再確認する（そもそも全学的な目標やミッションは国際化、グローバル化への対応を意識したものになっているか）と共に、国際化に向けた共通のビジョンを練り上げる、
- ⑤各チーム構成員の役割分担や担当を明らかにし、チームとしての作業日程を決める、
- ⑥グローバルな観点からの学習成果を明確に表す、
- ⑦国際化のためのレビューを実施する（国際化に関する基礎的な数値データの収集を含む）、
- ⑧自大学の強みと弱みを分析し（隠れた資源や実績を明らかにする）、報告書を作成する、
- ⑨ピア・レビューのチームを招聘し、現状分析の報告書に対する助言をもらう、
- ⑩グローバルな観点からの学習成果をアセスメントするための計画を作り上げる、
- ⑪戦略的国際化プランの素案（国際化に関するビジョン、ミッション、定義を含み、併せて、各部局、教育課程、事務局、学生支援サービス、研究、学外への情報発信や地域貢献事業をまたいで、相乗効果を促すような国際化プランであること）を作成し、理事会等の審議を経て、正式に戦略的国際化プランの策定とする、
- ⑫戦略的国際化プランを達成するために、時系列に基づく、項目別のアクション・プラン（できれば数値目標を入れる）を作成する、
- ⑬戦略的国際化プランに掲げられた各項目に対する責任者を割り当てて（任命し）、担当

する項目の進捗状況をモニターさせる。⑭ピア・レビューのチームや第3者評価機関を招聘し、戦略的国際化プランに基づく取り組みについて評価をしてもらう（改善案の提言を含む）、⑮その外部評価を基に改善プランを作成し、実行する。⑯国際化への取り組みが定着し、国際化に関する学内の認識、意識、姿勢が積極的になる。

10. 戦略的国際化プラン推進のための助言

戦略的国際化プラン推進のための助言として、以下の12点を指摘したい。①学長、副学長のリーダーシップ→大学全体のコミットメントは必要不可欠、②小さい成果でも認める、③すぐに結果がでるところから手をつけ、改革（変革）の成果を共有する、④国際関係部署（国際化を担当する部署）を理事、役員の下に位置づける、⑤改革（変革）には時間がかかるものがあるということを認識する（忍耐が必要であり、また達成できなかったことに対する部分的な評価をすることが重要：結果だけでなく、過程や努力も評価する）、⑥成果への過程を明らかにするためのデータを収集し、それを分析することで、その過程のどこまで達成できているかを可視化すること、⑦結果（成果と不成功）に対して、誰が責任を持つかを最初から決めておくこと、⑧国際化の過程の分析は改善への目的と一貫性をもたせること、⑨国際化に向けた取り組みについての現状分析では、自大学が何をしているかを挙げるだけでなく、なぜそれを行っているかを分析すること、⑩国際化の評価では既存の評価制度との統合を図り、評価疲れ・負担を回避すること、⑪ピア・レビューやベンチマーキングなどの手法を活用すること、⑫学生の課外活動も国際化の対象とすること。

Yale University の国際戦略に関するセッション（5月26日）

本セッションでは、Yale University における大学経営戦略の一環としての国際化への取り組み⁴を通して、以下の課題が提起された。

- 変化の時代に対応するための大学の国際化という認識を持っているか。
- Global University としての新たな組織文化を創出できるか。
- 意思決定のプロセスの検証と組織としての機動力の向上を図れるか。
- 戦略的広報の展開と情報公開・情報提供によってブランド力を強化できるか。
- 留学生受入れから送出しへのシフト、学生・教職員の海外体験の機会拡充をいかにして図れるか。
- 優秀な留学生及び外国人研究者の確保と支援体制の整備をどう図るか。
- 経営戦略における中長期計画の策定と資金の確保をどう担保するか。

⁴ Yale University の国際化の目標は、①相互依存が高まる世界において、学生のリーダーシップ及び社会貢献にかかわる資質や能力を育成する、②優秀な留学生と研究者を世界中から集め、支援し、育て、研究プログラムの質を向上させる、③Yale を Global University として位置づけ、国際的なイニシアティブを確立する。

- 危機管理及び危機対応の重要性の認識は高いが、その具体的な対策をどうするか。

以上

(文責：太田 浩)